

人と僕とでキャスターを務める番組の広報写真を撮影した時のこと。最初は僕が前に座り、女性2人が後ろに立つ配置でした。男性が中央や前方にいて女性がサポート役のように両端や後ろにいるのは、テレビなどではよくある構図です。しかし、ふとこれっておかしいのでは？」と思い、女性が前、僕が後ろの配置に変えました。メディアは本来、既存の表現や慣習がはらむ問題を指摘し、公平な見せ方を提示していくべきなのです。

して、いろいろな立場の人の言葉を聞き、反省と検証を重ねていくことがメディアの責任だと思っています。

多様な性の尊重のた めには大切なこと は何でしょうか。

日本では、みんなで一つの規範を共有することが重視されがちです。しかし、多様性を大切にする社会に向けては、一人ひとりが自分の意見や価値観を自由に表現できると良いと思います。そのためには、「他者と違う考え方を表明しても大丈夫」という心理的安全性を確保することが大切です。SNSでの意見は多様で面白いと思いますし、「#MeToo(性被害・性暴力の体験を告白・共有する際にSNSで使用されたハッシュタグ)」運動のように、自身の苦しみを

一人ひとり

価値観が違うからこそ、

多様で面白い。



©大田区

表すことのできた人や、これまでの価値観に疑問を提示することができた人も多くいました。一方で、SNSにはジェンダー差別的な言葉があふれている面もあります。自分に共鳴する意見しか見えなくなったり、心地良い言論空間の中でのみ過ごすようになったりするという状況が、さらに差別的な感情を加速させていくこともあります。こうした問題の中で、改めてメディアの役割が問われているのではないのでしょうか。SNSで個人の考えや感情、経験を共有し、メディアは正確かつ客観的な情報を発信してい

く。その上で、心理的安全性が確保され、楽しく自由に意見を交わせるコミュニケーションの在り方を、私たちが自ら示していく必要があると思います。

今後やりたいことを 教えてください。

ニュースを担当していた頃は、国内外で事件や事故が発生したら、昼夜を問わず職場へ駆け付けける生活でした。使命感に燃えていましたが、今振り返ると、ある意味仕事に縛られていました。また、妻は勤めていた新

聞社を退職し、家事・育児に専念してきました。当時は、社会全体で「男は仕事、女は家庭」という考え方がまだ根深く、そうではない選択は思い付かなかったです。そうして長年過ごしてきた、このほどフリーアナウンサーに転身したのですが、家庭での妻と私の役割も見直すことにしました。芸能事務所には所属せず、個人事務所を立ち上げたのですが、代表は妻です。名刺には、夫婦二人三脚で頑張ろうという思いを込めて、2人の名前を横並びに記しています。また、今までの堅いイメージとギャップがあると思いますが、出演する番組で、ありのままの自分を発信していきたいと思っています。これからも妻と協力しながら、新しい挑戦をしていきたいです。

※このインタビューは、令和5年5月26日に行いました。

